

晁卿衡を哭す（李白）

日本の 晁卿 帝都を 辞し

征帆 一片 蓬壺を 遶る

明月は 帰らず 碧海に 沈み

白雲 愁色 蒼梧に 満つ

日本晁卿辞帝都 征帆一片遶蓬壺
明月不帰沈碧海 白雲愁色満蒼梧

解説 晁卿衡は、わが国人の阿部仲麻呂の中国名です。遣唐使の随員として唐に渡り、七十七年に都長安に到着しました。以来、長安に留まつて唐の王朝に仕え、玄宗の厚遇を受けました。左補闕などを経て秘書監となり、衛尉卿を兼ねたといわれます。李白のこの詩は七五三年、洛陽から梁・宋に帰ったときの作であるとされています。まさに、この年仲麻呂はときの遣唐使とともに帰国の途にいたのです。ところが、海上で暴風雨に遭って難破し、安南（ベトナム）に漂着しました。仲麻呂は結局、長安へ戻って一生を終えたのですが、仲麻呂は死んだという噂が伝わって、李白の耳に入ったものとみられます。李白は仲麻呂が安南に漂着してふたたび唐王朝に仕えたことを最後まで知らなかったと思われまます。

通釈 日本の晁どののは長安を去り、遠く旅立つ船に乗り、船の帆の小さなひとひらが蓬壺のような日本をめぐった。清らかな月のような晁どのは、青い海に沈んで帰らぬ人となった。白い雲が憂いを帯びて、蒼梧の海に広がっている。